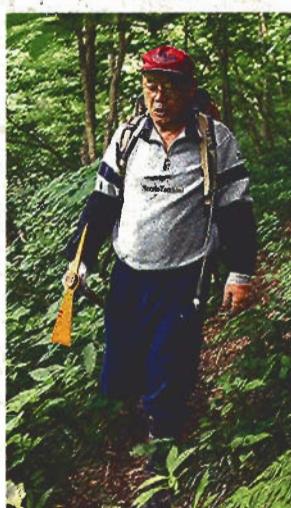


# 徳山ダムに沈まなかった門入地区



一度は移転した旧村民が舞い戻り、生活を続ける門入地区

## 峠越えで1時間半 旧村民に同行



峠越えの山道を歩いて門入地区へ  
向かう広瀬博さん=揖斐川町

## 変わらぬ自然 変わらぬ生活

揖斐川町の徳山ダム建設で廃村に追い込まれた旧徳山村に、唯一沈まなかった集落がある。村の最西端に位置した門入地区。車での進入路はない。訪れるには、ダム湖を渡る週二便の連絡船か徒步での峠越えしかない。それでも、陸の孤島となった集落には、変わらぬ自然と景色が残る。今も古里の暮らしにこだわり、険しい山道をたどる“村人”に同行した。

(岡本太)

十八日午前八時半。門入出身の広瀬博さん(53)は、旧徳山村と旧坂内村の間にそびえるホハレ峠にいた。大きくなりユツクにはトマトや乾めん、酒などの食材がぎっしり。軍手をはめた手には、つるはしがしっかりとぎつている。「よし、行こうか」。そうつぶやくと、慣れた様子でがけのような山道をすいすい下り始めた。

広瀬さんは三年前に定年退職を迎えて以来、雪の積もる冬を除いて今も門入地区で暮す。廣瀬さんが小学生だったころ、多くの村民が大垣市や岐阜市方面へ向かうのに使つたといふ古道。「まさか、この時代になつて使うことになるとは。今は貴重な道ですよ」。そう話すと、つるはしを使

らし続ける。週末には本巣市の自宅へと戻るが、週のほとんどを山村で生活。集落がそのまま残つた門入地区では、同じような住民が数人いるという。ホハレ峠から村まで一時間半はかかる。広瀬さんが小学生だったころ、多くの村民が大垣市や岐阜市方面へ向かうのに使つたといふ古道。「まさか、この時代になつて使うことになるとは。今は貴重な道ですよ」。そう話すと、つるはしを使

い、崩落しかけた道を修復し始めた。たどり着いた門入地区に「ダムに沈んだ村」という暗い雰囲気はなかつた。西谷川の瀬音が響き、集落を囲む山々ではブナやスギの緑色が風にたわむ。道ばたではクワの実が色づき、イモリが時折顔をのぞかせる。道路には船で運んできたとみられる車が行き交う。かつて家屋があつたという場所に、ぼうぼうと生い茂る草木だけが時間の流れを示していた。

「ここに来ると、ほつとする」広瀬さんは川で魚を釣り、畑で野菜を作り、山菜を食べて一日を過ごす。電気と電話は通つているが、それ以外は何もない。「車で来られないのは不

満と水をたたえるダム湖は、ひつそりと静まり返り、水面近くの木々は白く枯れてい

る。かつて住民が住んでいたという面影はなく、人のいない望郷広場が寂しく広がつてい